

裁判所で考えた「税の正義」

大阪女学院中学校3年 富田 莉櫻

この夏、私は裁判所を見学した。実際に傍聴もさせてもらい、ドラマでしか見たことのないような本物の法廷の空気を体験した。白く広い法廷には、静かな緊張感が張りつめていた。証言台の前に立つ被告人、真剣な表情の裁判官、そして一言も聞き逃すまいとする傍聴席の人々。その姿を見て、「裁判ってこんなに静かで、でも重たいんだ」と感じた。

傍聴したのは、ある暴力事件の裁判だった。税金とは直接関係のない内容だったが、判決が言い渡される瞬間、私は思った。「これが『正義』なんだ」と。

私にとって『正義』とは、「ルールを守ること」だ。裁判所は、社会のルールを破ってしまった人に向き合い、何が正しいかをはっきりさせる場所。そして、その裁判所自体が税金によって支えられている。建物も人件費も、使われている資料や設備も全てが税金で賄われている。もし税金がなければ、裁判所も正義も成り立たない。

税金という言葉には、どこか「取られるもの」というイメージがある。でも、裁判所見学の経験から、私はその考え方が変わった。税は「正義を支える力」だと思った。道が整備されているのも、警察が安全を見守ってくれるのも、災害のときに避難所が開設されるのも、全部が税金のおかげ。つまり税金は、見えないところで人々の命や平和を守っている。

さらに言えば、税をきちんと納めることもまた「正義」だ。税金を払わない人がいたとすれば、その分誰かが苦しむ。社会の仕組みは、みんながルールを守ってはじめて成り立つ。税のルールを破ることは、裁判で罰せられることもある。税金は単なるお金のやり取りではなく、社会全体を支えるための約束ごとだ。だからこそ、その約束を破る人を放っておいては、社会の仕組みそのものがゆがんでしまう。

それを見逃さず、正しく判断するのが裁判所の役割だと、見学を通して知った。

裁判所は正義を示す「場所」であり、税もまた正義に深く関わっている。

ルールを守ることの大切さと、それを支える税の重みを、あの日私は法廷で実感した。

それまでは税金に対して「取られるもの」「なんとなく面倒なもの」という印象しかなかった。しかし、今では税が社会の仕組みを支える「柱」であり、「正義の実現」にも深く関わっているのだと気づいた。

将来、社会の一員として生きていく中で、税に無関心ではいられないと感じた。税の役割や仕組みを正しく理解し、自分にできることを考えて行動する力を身につけたい。責任ある納税者として。これからの社会と向き合い続ける立派な大人になりたいと、正義を守る人たちの背中を裁判所で見たからこそ、そう強く思う。